

研究の概要

藤田裕嗣

1. 研究の目的

本巻は、国立歴史民俗博物館共同研究「元禄『堺大絵図』」に示された堺の都市構造に関する総合的研究（二〇一〇年度～二〇一二年度）の成果報告である。初めに、その目的について述べておきたい。

堺環濠都市（大阪府堺市堺区）は、戦国期から近世前期にかけて日明貿易や朱印船貿易の拠点となり、会合衆により自治的に運営されるなど、輝かしい歴史の舞台として知られている。本館所蔵、元禄『堺大絵図』に示されている堺の環濠内が「堺環濠都市遺跡」とされ、その発掘・試掘調査は一、〇〇〇件を越した。地中に眠った戦国期までの都市像について、発掘事例が増えた近年では数少ない発掘成果を強引に結びつけることなく、発掘された遺構と遺物自体に素直に対峙する態度が重要となっている。その際、近世初期の状況を一筆レベルの詳細さで示す同絵図は、貴重である。写真複製版^①も刊行され、近世史学や建築史学など、様々な立場から研究が進められてきたとはいえ、一九七七年の出版と古いうえに、絵図自体が大型過ぎて、細部までは読みにくい難点があった。この難点は、画像処理技術の進歩により克服できると期待される。本研究は、まず、写真を撮影して、絵図に描かれた土地区画とそこに盛られた

文字注記に関する基礎的なデータを確認・共有することから始める。本絵図のデジタル画像を用いれば、発掘データをそれとの位置関係で詳細に検討でき、考古学が、歴史地理学・文献史学・建築史学と協働できると期待される。同絵図に示されている堺の都市構造は、大坂夏の陣で全焼の被害を蒙った後、江戸幕府が堺に込めた総意の表現と考えられ、それを理解するためにも、その前提となる戦国期の復原が望まれる。さらに、一七世紀になると大坂が、江戸幕府の肝いりで天下の台所として大規模土木工事も伴って整備された。その中で、兵庫と尼崎を含む大阪湾、引いては瀬戸内や日本列島全体との流通関係をも念頭に置きつつ、流通の拠点としての堺が描かれた同絵図に新しい光を当て、再評価を試みる。

2. 研究会と作業の記録、および研究組織

第1回研究会 二〇一〇年八月二一日（土）～二二日（日）

国立歴史民俗博物館会議室

- ・ テーマ…国立歴史民俗博物館本「堺大絵図」の概要把握と今後の研究方針
- ・ 趣旨説明 藤田裕嗣（研究代表者）
- ・ 絵図調査…国立歴史民俗博物館本「堺大絵図」

・研究発表と討議

- 1 「堺の発掘調査と『元禄二己巳歳堺大絵図』」 嶋谷和彦（堺市市長公室文化財課）
- 2 今後の予定に関する意見徴収を含め、総合討論（共同研究メンバー全員）

第2回研究会 二〇一〇年九月一九日（日）～二〇日（月・祝）

大阪歴史博物館（大阪市）など

- ・テーマ：大阪歴史博物館の展示と堺南部の現地調査
- ・大阪歴史博物館特別展の見学 「新淀川二〇〇年―水都大阪と淀川」展
- ・研究発表（大阪市、大阪歴史博物館）
 - 1 「文献史からみた中世界の都市空間」 大澤研一（大阪歴史博物館）
 - 2 総合討論（共同研究メンバー全員）
- ・現地調査（二〇日、堺市） 案内者：嶋谷和彦（堺市市長公室文化財課）
堺市役所二階展望ロビー↓大小路交差点↓開口神社↓宿院交差点↓宿院頓宮↓発掘調査SKT110（女性センター地点）↓発掘調査SKT960（少林寺団地地点）↓大安寺↓南宗寺
- ・絵図調査：堺市博本「堺大絵図」の謄写版を熟覧

第3回研究会 二〇一〇年十一月二日（火）～三日（水・祝）

大阪市立美術館（大阪市）など

- ・テーマ：堺（特に北部の巡検）と住吉大社との関係に関する現地調査
- ・大阪市立美術館 「住吉さん 住吉大社一八〇〇年の歴史と美術」展
- ・研究発表
 - 1 「美術にみる住吉大社と堺」 井溪 明（堺市立みはら歴史博物館・ゲストスピーカー）
 - 2 「堺大絵図を用いた歴史情報のデジタル化と復元情報の視覚化」

高屋麻里子（筑波大学大学院システム情報工学研究科・研究員）

- 3 総合討論（共同研究メンバー全員）
- ・現地調査（三日）
- 1 堺市堺北部 案内者：嶋谷和彦（堺市市長公室文化財課）
井上家住宅（鉄砲鍛冶屋敷跡）↓清学院↓高須神社↓水野鍛錬所↓綾之町交差点↓堺市立町家歴史館 山口家住宅（国の重文）↓月蔵寺↓本願寺堺別院↓妙国寺↓刃物ミュージアム↓ザビエル公園↓菅原神社
 - 2 住吉大社とその周辺 案内者：大澤研一（大阪歴史博物館）

第4回研究会 二〇一一年三月三日（木）

元興寺文化財研究所（奈良市）

- ・テーマ：国立歴史民俗博物館本「堺大絵図」の修理作業に伴う諸問題の検討
- ・絵図調査：国立歴史民俗博物館本「堺大絵図」
- ・現地調査：元興寺周辺の奈良町

第5回研究会 二〇一一年六月三日（金）～四日（土）

国立歴史民俗博物館会議室、など

- ・テーマ：前年度のまとめと問題点、国立歴史民俗博物館本「堺大絵図」修理の課題
- ・研究発表等
 - 1 前年度に先行して修理し、本館に戻された「堺大絵図」二枚を熟覧して、今年度を実施する修理について問題点と課題を検討した。
 - 2 前年度の成果についてまとめ、三年間にわたる展望の中で各研究分担者の分担項目を確認した（共同研究メンバー全員）。

第6回研究会 二〇一一年八月二日（日）～二日（月）

堺市立中央図書館など堺市内

- ・テーマ…絵図調査と堺環濠都市遺跡内の発掘調査現場における見学・踏査
- ・絵図調査…堺市立中央図書館が所蔵する堺の絵図を熟覧した。
- ・現地踏査等…堺環濠都市遺跡内で実施された発掘調査の現場で発掘調査担当者から説明を受け、議論した。その上で、堺北部で当時の海岸線付近を中心に踏査した。

第7回研究会 二〇一一年九月二七日(火)～二八日(水)

堺市博物館・堺市立中央図書館

- ・テーマ…堺に関する研究発表と絵図調査など
- ・研究発表等…堺市博物館でゲストスピーカーのお二人から堺に関する話題提供を受け、議論を深めた。
- 1 日本の博物館と堺市 谷直樹氏(大阪市立大学)
現代日本における博物館活動の中で、開館当初にも遡り、堺市博物館を位置づけた報告であった。
- 2 近世界の名産としての船簞笥 小泉和子氏(昭和のくらし博物館長)
船簞笥をめぐって、中世にも遡り「簞笥」から論を起し、船簞笥は海外にも名声を博した近世界の名産であったと指摘された。
- 3 総合討論(共同研究メンバー全員)
日本全国(後者では海外)から見た堺、というスケールの大きな議論ができた。
- 4 納品されたPDFについて、まずその操作に関して説明した上で、来年度に実施する予定の堺大絵図展における活用方法をめぐって議論し、展望が得られた。
- ・絵図調査…堺が描かれた堺市立中央図書館所蔵近世絵図の熟覧を継続した。

第8回研究会 二〇一一年一〇月二四日(月)

大阪歴史博物館・元興寺文化財研究所

- ・テーマ…近世大坂に関する展示見学と絵図修理現場の調査
- ・内容等
- 1 大阪歴史博物館の展示「古文書からみる大坂の町」をメンバーの大澤研一氏による解説を交えて見学し、絵図の機能について議論した。
- 2 国立歴史民俗博物館本「堺大絵図」を修理されている現場で修理状況を見学し、今後の方針について検討した。

第9回研究会 二〇一一年十一月五日(土)～六日(日)

福岡市

- ・テーマ…博多・山口・豊後国府(大分)を巡る海外交流に関する研究会
- ・内容…博多・山口・豊後国府(大分)の海外交流に関する研究会と合流し、連動させた。堺との比較では、とりわけ博多津がポイントであると確認できた。

第10回研究会 二〇一一年十一月二三日(水・祝)～二四日(木)

大阪歴史博物館・堺市・西宮市大学交流センター

元興寺文化財研究所

- ・テーマ…堺・戎島周辺の踏査と絵図修理現場の調査、など
- ・内容等
- 1 大阪歴史博物館の展示「古文書からみる大坂の町」を見学し、絵図の機能に関する議論を継続させた。
- 2 メンバーの嶋谷氏による案内を得て、堺・戎島を中心に当時の海岸線付近を踏査した。
- 3 「近世測量絵図を素材とした歴史GIS分析―鳥取城下町の事例か

ら」鳴海邦匡（メンバー）

- 4 尼崎城下町踏査（藤田が案内）と「尼崎市文化財収蔵庫」・「尼信博物館」の見学
- 5 国立歴史民俗博物館本「堺大絵図」を修理されている現場における修理状況見学を継続させ、一ヶ月前と比較し、今後の方針について検討した。

第11回研究会 二〇一二年二月十一日（土）～十四日（火）

いのちのたび博物館、高知県立歴史民俗資料館、川西遺跡、勝瑞城跡

- ・テーマ…港湾に関連する展示と発掘現場の見学
- ・内容等

- 1 北九州市のいのちのたび博物館で開催された冬の特別展「大内文化と北九州」を見学した。周防山口が拠点であった大内氏が博多津に注目していたことは、筑前住吉神社「博多古図」などからも伺われる。
- 2 高知県南国市の高知県立歴史民俗資料館で開催中の「発掘された日本列島二〇一一」展を岡本桂典学芸課長による解説で見学した。特に隣県、徳島県徳島市の川西遺跡が焦点になるような解説をお願いした。
- 3 徳島県徳島市・川西遺跡と寺山遺跡の現場を訪れ、島田豊彰氏（徳島県埋蔵文化財センター）の解説を得た。現場は、阿波国吉野川下流平野の南端を流れる園瀬川との関係が指摘されており、それが流通に果たす役割をめぐって検討した。
- 4 徳島県藍住町の勝瑞城跡を発掘担当者の重見高博氏の説明により見学した。城主の三好氏が畿内に進出した経緯もあって、庭園を鑑賞するためとも考えられる建築物にも畿内の影響が推察される点に注目すべきである。

第12回研究会 二〇一二年五月二日（水）

国立歴史民俗博物館会議室、など

- ・内容等…今後の方針について意見交換した。

第13回研究会 二〇一二年六月八日（金）

国立歴史民俗博物館会議室、など

- ・内容等…修理が施されて博物館に納品された絵図を確認し、熟覧した。さらに、特集展示「元禄の堺大絵図―巨大都市図を歩く―」（十二月一八日～一月二七日）に向けて、今後の検討課題について議論した。

第14回研究会 二〇一二年八月二三日（木）～二四日（金）

国立歴史民俗博物館会議室、など

- ・内容等…特集展示「元禄の堺大絵図―巨大都市図を歩く―」に関する「開催要項」などについて打ち合わせた。

第15回研究会 二〇一二年十一月二三日（土）～二五日（月）

大阪城天守閣と堺市博物館、山口県政資料館

- ・テーマ…近世大坂に関する展示見学と第一七回中国・四国地区城館調査検討会 山口大会
- ・内容等
- 1 二三日は、今後の研究計画について具体的に検討した後、午後は大阪城天守閣と堺市博物館に赴いて、特別展「秀吉の城」と地域展「激動の時代『慶長』を掘る」を、解説付きで見学し、意見交換を行った。
- 2 二四日から、山口市で開催された第一七回中国・四国地区城館調査検討会に合流した。「資料からみた中世城館跡」という統一テーマで、戦国期までに機能を停止した後、文献史料などにいかに記録

されているか、が問題にされた。史料がなくとも遺物自体に語らせてきた考古学が、文献史学に対して共同研究を提案しているとも評価できよう。歴史地理学の立場から開催地の山口に即して言えば、近世に作成された「山口古図」の解釈が焦点となる。

第16回研究会 二〇一三年一月二六日(土)～二七日(日)

国立歴史民俗博物館会議室など

- ・テーマ・特集展示「元禄の堺大絵図―巨大都市図を歩く―」の見学と堺に関する研究発表、など
- ・内容等…

1 二六日は、特集展示「元禄の堺大絵図―巨大都市図を歩く―」の見学と討論を行った後、ゲストスピーカーとして藤本誉博氏(今治城・今治市河野美術館)に「戦国期堺の『自治』をめぐる」と題した報告をお願いし、討論した。

2 二七日は、同じくゲストスピーカーの吉田 豊氏(堺市博物館)による「近世における堺港の変遷」に関する話題提供を踏まえ、議論を積み重ねた。さらに、今後の打ち合わせも行った。

第17回研究会 二〇一三年三月七日(木)

赤煉瓦文化館(福岡市文学館) など

- ・テーマ・博多津の現地踏査
- ・内容等…堺と同様、中世に海外に開かれた港町と言える博多を研究対象として取り上げ、福岡市教委の大庭康時氏にお願いし、発掘調査の最新状況について赤煉瓦文化館でご説明を受けた後、巡検で現地を訪れ、実地で確認した。

第18回研究会 二〇一三年三月十三日(水)～十四日(木)

大津市歴史博物館・大阪歴史博物館・堺市立町家歴史館(清学院) など

- ・内容等…

1 一三日(水)は、大津町に関する大津市歴史博物館の展示に併せて企画した。大場修・京都府立大学教授による「近世大津町絵図」と題された研究発表とそれにまつわって、議論をした。さらに、展示担当の学芸員、高橋大樹氏による解説の下、熟覧した。

2 続いて一四日は、午前中にメンバーの大澤氏による解説の下、大阪歴史博物館の特別展「天下の城下町 大坂と江戸」を見学した。午後は堺市内に移動し、国の登録有形文化財である片桐棲龍堂を中心に踏査して、堺環濠都市内の清学院にも巡検は及んだ。

第19回研究会 二〇一三年三月二〇日(水)～二一日(木)

鳥取県立博物館

- ・テーマ…詳細で精密な絵図が作成された鳥取城下町に関する研究会と鳥取県立博物館所蔵の城下町絵図の熟覧。
- ・内容等…

1 二〇日は、ゲストスピーカーの塚本章宏氏より、iPad2のアプリを利用して、安政五(一八五九)年「鳥取城下全図」を古地図ぶらりに載せ、市民への啓蒙に生かした試みについて報告された。それに関連させ、国立歴史民俗博物館での特集展示でiPad2を用いた展示補助システムについても、メンバーの高屋麻里子氏から説明を得た。市民の反応や今後の展開に関する可能性も含めて、議論した。

2 二一日は、前日に紹介された「鳥取城下全図」に加え、「大正五年(一七二五)～享保二年(一七二六)」、天保一四年(一八四三)の三時点)など、鳥取県立博物館所蔵の城下町絵図を熟覧した。

第20回研究会 二〇一三年三月二三日(土)～二四日(日)

・テーマ…現在地に一七世紀中葉に移転し、幕末に開港された新潟を対象とした踏査と絵図の熟覧。

・場所…新潟市歴史博物館；小澤家住宅・新潟市文化財センター
・内容等

1 二三日は、新潟の港町と日和山などを踏査しつつ、新潟市歴史博物館まで赴き、同館所蔵の絵図を熟覧しながら、議論した。

2 二四日は、新潟市の文化財指定を受けている小澤家住宅について、丁寧な解説の下、見学した。午後は、新潟市文化財センターで遺物を見学しつつ、近世新潟町跡の発掘調査について説明を受け、討論した。

研究組織(所属はいずれも二〇一〇年度現在)

藤田 裕嗣 神戸大学大学院人文学研究科・教授(代表)

鳴海 邦匡 甲南大学文学部・准教授

松尾 信裕 大阪城天守閣・館長

大澤 研一 大阪歴史博物館・学芸員

嶋谷 和彦 堺市市長公室文化財課・学芸員

高屋麻里子 筑波大学大学院システム情報工学研究科・研究員(非常勤)

青山 宏夫 本館・研究部・教授

小島 道裕 本館・研究部・教授

岩淵 令治 本館・研究部・准教授

玉井 哲雄 本館・研究部・教授(副代表)

4. 成果と課題

今回の共同研究で得られた成果の概要について、本報告書の内容にも

触れながら、紹介しておきたい。

(1) 国立歴史民俗博物館本の高精細画像の構築と関連する調査

二〇一〇年度は当初計画で、同絵図の写真を撮影する予定にしていたが、熟覧して検討した結果、本プロジェクトで重視している高精細画像作成に耐える水準を確保するには絵図自体の状態が悪く、まず修理が前提になると判明した。そこで、十枚構成のうち二枚を選定して試行的に修理を進め、今後の指針も得た。すなわち、原図の上に付けられた貼紙を剥がし、その下を確認したところ、今回の二枚では目立った描写は認められなかったが、来年度に託された八枚では十分に想定される。この過程を探るには、原図により近いと評価されている堺市博物館本との比較検討が有効であろうと考えられ、堺市博本の熟覧を試みた。しかし、全体が北と南で各一枚ずつに貼り継がれているため、開くことも難しく、写真撮影も非現実的であると判明し、謄写本の調査に留めざるを得なかった。そこで、堺市博物館で撮影された後者の4×5ネガフィルムを用いてデジタル化した。

同絵図に描かれた土地区画とそこに盛られた文字注記に関する基礎的なデータの共有・校訂については、既に撮影されていた写真データを用いて南部から始め、複製版の解説における読みの誤りも検出できた。『堺大絵図』の複製に基づく画像処理と地図データの分析も進めた。

歴博本の高精細画像構築という最終的な目標に向け、前提となるデジタル撮影をするためにも、平面を確保すべく、まずは修復が先決だと判明し、初年度中に二枚を先行させたのに続いて、残り八枚の修理を第二年度に行った。前年度における修理の成果を六月に確認して、予め注文を出し、年度途中には修理の現場も二回(第8回と第10回)に分けて訪れ、具体的な方法をめぐって業者と打ち合わせしながら、修理の完了に全力を挙げた。修理現場の見学を一ヶ月挟んで行ったのは、一回目で問

題になった点について、次の一ヶ月の間に確認でき、効果的だったと考えられる。一方で、歴博本より古い状態を示すと予想される堺市博物館本「堺大絵図」について、上述の通り、その写しの写真を初年度の予算でデジタル化したのが、歴博本の修理作業工程中に見られる種々の問題点について検討するのに有用であり、修理の際にも役立つ。歴博本の複製版により、同絵図に描かれた土地区画とそこに盛られた文字注記に関する基礎的なデータを共有・校訂するための作業も、同時並行的に進めた。

「堺大絵図」の修理が完了し、デジタル撮影したデータを用いて、高精細画像構築という最終的な目標に向けた努力を重ねた。

一方で、同絵図に示された土地区画について、建築遺構のみならず、考古学的成果からも検証し、同絵図が作成された元禄期の状況を押さえるための読みの作業も進めた。さらに、遺物や遺構から戦国期まで遡る検討を進めるため、考古学的成果によるデータの整理も行った。

最終年度の二〇二二年度に、その成果の一部を特集展示の形で披露した。具体的には、「元禄二年堺大絵図」を紹介する特集展示として、『元禄の堺大絵図―巨大都市図を歩く―』を二〇二二年二月一日(火)～翌年一月二七日(日)まで開催した。

環濠都市、堺の町は南北にやや長く、紀州街道(大道)が縦断し、それと直交する大小路が、摂津国と和泉国との境界線になっていた。摂津国堺北荘(大小路以北)と和泉国堺南荘の描かれ方は、互いに大枠では類似しながらも、そもそも別々に作成されたと考えられるが、特集展示では、共同研究の成果の一部として、デジタル上で一枚に接合させる形でプリントアウトし、床面に張った。作成された元禄時点でも南北は別の図と意識されていた筈で、今回の展示で史上初めて、南北を一枚の形で提示できたと言えるのである。国立歴史民俗博物館で開催した本展示の機会は、研究成果をまとめる契機として、やはり大きかった。

さらに一点のみ補足する。今回の展示では、普及が著しいiPadを用いた展示補助システムを構想した。観覧者自身によって持ち込まれたiPadを用いたシステムは、様々な点で難しいと判り、会場に常設したiPadを活用する方針に変更したが、会期中におけるシステムのメンテナンスに課題が残る結果となった。また利用者側にとっては、利用できない時間帯が出たり、そもそも利用が、操作に慣れた一部の者に限られたり、などの課題が残った。とはいえ、元禄期の「堺大絵図」に示された土地区画が現代の堺にまで連れることを理解してもらうには、やはり有効な手段だったと言える。判り易い展示のためには今後とも取り組むべき課題だと思われる。

以上のような絵図の修復と撮影から展示に至る顛末に関して、本報告書では小島道裕報告で説明されているので、参照されたい。

「堺大絵図」を全面的に修理して、付箋なども全てデジタル撮影してあり、高精細画像に組み入れる配慮を施した。そして、そこに示された土地区画について、建築遺構のみならず、考古学的成果からも検証し、同絵図が作成された近世前期の状況を押さえられる基盤は整った。経緯度を与えることで、GISによる高精細画像の構築も視野に入れつつ、戦国期の復原について、戦国期の遺物・遺構まで遡って考古学的成果を検証して、戦国期の都市構造に迫ることも可能なシステム設計である。

(2) 「元禄堺大絵図」に示された都市像とその後の変遷に関する研究

堺について、本絵図が作成された元禄期とその後の変遷を辿る課題に関して、高屋真理子報告が全面的に取り組んでいる。大澤研一報告は、特に「本願寺北御坊祠堂屋敷」に限り、本願寺堺別院(北御坊)所蔵の絵図を中心に検討している。

第一年度に大阪市内で開催された、堺に関連する二つの展覧会を機縁に、堺との関係をにらみつつ、検討した。現地調査により、同絵図に示

された都市構造と残された現況、さらには研究の現状を押さえる課題に取り組んだ。

さらに、堺の都市構造を検討する際に、堺環濠都市遺跡内で実施される発掘調査のデータも重要である。発掘調査が第二年度に実施され、夏にその現場で発掘調査担当者から説明を受け、堺環濠都市遺跡における遺物・遺構の先進性が印象的であった。発掘現場周辺の堺北部で当時の海岸線付近を中心に踏査し、議論を深められた点も、歴博本の絵図が今日の状態に至るまでの過程と関わり、意義深いと考えられる。

第三年度の特集展示の機会に、床面に一枚で展示できたからこそ見えてきた論点として、ここでは二点を掲げるに留める。

一つは、海岸線近くに朱線とともに、その海側の区画には茶色の四角い付箋が貼られているが、大小路の北側、すなわち摂津国側は、太い墨線に代わっており、四角い付箋の位置は、一部は、陸側にも付けられていると観察できた。これは、「町屋海二成る」の注記をも勘案すれば、元禄二年の作成以降に、後退した海岸線が注意深く書かれているのであり、元禄二年当時の区画が、そのままでは機能しておらず、付箋は、そのままの地代はとれない区画に付けられているという解釈は成り立つと思われる。その解釈が妥当なら、陸側でも、海側でも同様であると言え、付箋の位置に関する観察結果とも矛盾しない。

二点目として、大小路より南側で、和泉国に属する宿院・念仏寺（開口神社）の区画とともに、大小路の北側に位置する天神・奉行屋敷について南北・東西の長さに関する注記に注目し、相互に比較すると、奉行屋敷は、他の三区画の大きさを勘案して、計画的に設定された可能性がある、との発想を得た。すなわち、南の念仏寺と北の天神の区画は、ほぼ同様の大きさであるのに対し、奉行屋敷は、宿院の大きさに類似しており、方角は九〇度曲げる形で入れ込まれた可能性を考えたのである。奉行屋敷の「表」がやや短いのは、東側に七間五尺二寸の「丑寅角屋敷」

があることと無関係ではなからう。この奉行屋敷以外の三区画は、その周りを取り込むことで相互に調整可能だったと考えられよう。

この二点は、藤田報告で前者は第3章で図7も付け、後者は第2章で表4を掲げつつ説明したが、今後の更なる検討が必要である。

③ 流通の拠点、堺が描かれた「元禄堺大絵図」をめぐる流通関係に関わらせた再評価への試み

さらに、一七世紀になると大坂が、江戸幕府の肝いりで天下の台所として大規模土木工事も伴って整備された。その中で、兵庫と尼崎を含む大阪湾、引いては瀬戸内や日本列島全体との流通関係をも念頭に置きつつ、堺の位置づけを試みた。流通の拠点としての堺が描かれた同絵図に新しい光を当てる試みは、達成されたと言えよう。

この点とも関わり、第二年度の六月に研究代表者の藤田自身が「一五〇一七世紀における兵庫と堺をめぐる国際交流―大坂と淀川の整備事業に注目して―」と題して、中華民国・台北を舞台に行った報告は、流通関係に焦点を当てたものである（『海港都市研究』七、二〇一二）。このような国際学会・シンポジウムの機会を利用したグローバルな発信は、一貫して藤田が果たした。初年度は、修理に特に関わらせた論点に絞って、夏にチェコ・プラハで開催された国際歴史地理学者会議で報告を行い、幸いに反響を得た。最終の第三年度は、同絵図が持つ研究資料としての意義について、中国・中山大学で開催された国際シンポジウムで報告した。

最終年度に特集展示が終わった後の方針としては、玉井副代表とも打ち合わせ、元禄二年「堺大絵図」を全国の近世都市ならびにそれが描かれた絵図に位置づけるために、各地で開催した。各々における検討内容は、上述した各報告に譲るが、ここでは、二側面について提示するに留める。

一つは、江戸時代前期に都市プランの改変を受けた点で、堺は、今回、

踏査対象とした新潟や博多はもちろん、城が置かれて城下町化が試みられたであろう、近隣の兵庫とも共通する、という点である。城下町のみならず、港町にとっても、近世前期は、大変革の時代だったのである。二つ目は、土地区画までを描く大縮尺の絵図が、元禄期にこそ作成できたという可能性で、地図発達史に関する論点と言える。この二点を考える際に、大津町は重要なフィールドとなり、大津城の復原が検討課題である。

なお、堺が接する摂津や隣接する河内の諸都市（摂津天王寺と河内八尾）と比較した論点は、本報告書に盛られた成果の中では、松尾信裕報告で述べられている。また、岩淵令治報告は、江戸の沽券図との比較が検討されている。そして、そもそも堺自体に論点を戻せば、堺が近世前期に幕府領となり、「元禄堺大絵図」が作成されたのは、近世初頭に堺が重要だったからこそ、であり、藤本誉博報告は、その前代としての、一六一五年全焼前の堺における政治動向について少ない史料から考察したもので、現時点における研究の到達点を示すといえよう。ゲストスピーカーとしての報告に基づき、投稿していただいた次第である。

註

(1) 前田書店出版部編『元禄二己巳堺大絵図』前田書店、一九七七

(神戸大学大学院人文学研究科、国立歴史民俗博物館共同研究代表者)